（1813 ～ 1860）です。

いわきで材木商を営んでいた平蔵は江戸の大商人明石屋と取引をしており、江戸滞在中にアメリカのペリー艦隊が来航し、開国を迫っていた頃で、沖に浮かぶ黒船が黒煙を吐いているのみて火事と勘違いする位でしたが、先見の明があった明石屋の主人は蒸気機関を説明し、石炭の重要性を伝授したのです。

そこで思い出したのが、いわき地方で古くから伝わる「くんのうこう」という猪を追い払う野火に燃える石を用いており、もしかしたらそれが石炭ではないか、と思い至り、それを明石家の主人に告げたところ、資金を出すから探索をしてくれないか、と話は纏まり、帰郷してからは材木商は番頭さんに任せ、平蔵は夏井川の川岸を探索し、それらしき石を集めては燃やしてみて、同じような石を集めて「かます」に詰め、馬の背で江戸まで運んで明石屋の主人に見せたところ上質の石炭に間違いないと折り紙付きとなり、いわき地方には必ず炭田があると確信して探査を続け、ついに安政２年（1855 年）弥勒澤で石炭層を発見、これを採掘して叺（カマス）に詰め馬の背で小名浜まで運びそこから帆船で江戸へ運び明石屋へ納入した。

更に平蔵は安政５年には石炭から油（コールタール）を作ることにも成功していますから才能のあった人物だったのでしょう。

この頃、江戸幕府は開国の機運が高まり、勝海舟の奔走もあって品川に軍艦操錬所を作り、英国から中古の蒸気機関の軍艦を買い上げ、その軍艦が必要とする石炭 3 千俵を納入するよう平蔵に申し付けた。

この買い上げが常磐炭田開発の端緒となった。

平蔵は幕府の注文に応えるべく最善の努力をして無事納品し、その功により引続き商談が舞い込み、石炭御用商人に任じられた。

次第に石炭商としての地盤を強化し、幕府は外国貿易は横浜を中心とすることを決め、平蔵の商売も横浜を中心とすることを決め、石炭を横浜揚げで販売し、同時にいわき特産の和紙（上遠野和紙）干し椎茸を横浜に運び、外国商人に売った。

先見の明・商才も秀ており、新しい貿易の町、横浜の街つくりにも貢献している。後の横浜商人は「開港の恩人」として尊敬しているから相当の人物だったらしい。平蔵は万延元年（1860 年）未だ 48 歳であったが江戸で死去した。

◎　片寄平蔵（1813 年）文化 10 年 2 月生～（1860 年）万延元年 8 月 3 日 48 歳没。

四ツ倉村と草野村の中間に石城郡大浦村という小さな村があった.

その村の大字大森が生家となっているが定かではない。この大浦村には大字上片寄と下片寄があり、現在ではいわき市四ツ倉大字上片寄、下片寄で、いわき駅前から常磐交通の路線バスで上片寄行があったが、現在は廃止になったらしい。。

いわきで材木商を営んでいた片寄利兵衛の婿養子になって片寄姓になり、材木商の後継者となった。（江戸時代に苗字帯刀を許されていたのは相当な家柄と思わ